

Blackdogs 3

Kuroneko Saku



Black Dogs 3

黒ねこ作

登場人物一覽

【八倉直人】ヤグラ ナオト

モグリの義術医を営む青年で、このシリーズの主人公。

第四次大戦中は「暗殺者」と呼ばれる旧日本国防軍の特殊工作員だった。

顔無し事件を経たことで自身の復讐に決着をつけ、親友の死を乗り越えた。

事件後、レイヴンと友人以上恋人未満の曖昧な関係を保った同棲をしている。

【神近梓】カミチカ アズサ

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の女社長で、「少佐」が通名の本作主人公。

旧日本国防軍時代に「走狗・走狗部隊」と呼ばれた第113特殊戦闘部隊を率いた。

どぶ沼に生活能力と常識を丸ごと投げ捨てたようなダメ人間の見本。

一方、最凶最悪の死神的な傭兵として同業者達からは恐れられている。

【レイヴン】

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』に所属する傭兵でフィリピン系の少女。第四次大戦中は反中ゲリラを経て、日本国防軍に現地徴用された過去を持つ。顔無し事件を機に家族の復讐を終え、今は直人を支えるために生きている。教団事件以来、エルヴィとは直人を巡ってライバル関係にある。

【エルヴィ】

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』で長距離狙撃を担うドイツ人の少女傭兵。頭の回転が早く日本語も堪能だが、常に防弾仕様のメイド服を着ている。直人を想う乙女だが、恋敵とは容赦なく殴り合う戦闘系メイドの鑑である。

【サーニャ】

レイヴンを慕って行動を共にする傭兵でロシア人の少女。第四次大戦中に軍の洗脳処置を受け、精神年齢が六歳前後のまま止まっている。純真で無邪気な性格や言動とは裏腹に罪悪感や善悪の基準がほとんどない。

【御堂 翡翠】ミドウ ヒスイ

第四次大戦中、エルヴィと走狗部隊で狙撃手をしていた少女傭兵。教団事件で救い出されて以来、直人の診療所でリハビリを続けている。エルヴィとは親友であり、彼女の観測手として戦中は組み続けた。

【久間 迅蜂】ヒサマジンパチ

第四次大戦中、「白狼」という二つ名で恐れられた旧日本国防軍の元軍人。神近と第三次大戦からの付き合いで、事あるごとに苦労させられている。ホットドッグを毎日のように食しているホットドッグ中毒者。

【スミス・スターロン】

銃器や義術部品を加工しているアメリカ人で、直人の良き友人。修理や改造の腕だけは確かなアメリカ陸軍の元兵士で無類の女好き。

■ 傭兵組合

【ラッセル・クライムバード】

東京の傭兵を束ねる『傭兵組合』の社長で元アメリカ陸軍少将。自称「誰よりも優秀な経営者」であり、ビジネスのプロを自負している。金儲けのためなら他人を食い物にすることすら厭わない悪党。

【サミュエル・アンダーソン】

ラッセルの秘書を務めており、『傭兵組合』の参謀的立ち居地にいる男。アメリカ出身の白人だが、それ以外の過去や経歴が一切謎に包まれている。頭が切れる人物な一方、目的のためなら倫理も手段も選ばない外道。

【イレーナ・ウォーリア】

『傭兵組合』に飼われているロシア人の少女。
殺人と性欲の捌け口として使われる以外に生きる術がない。
一切を声を出せないため、意志疎通を筆談で取っている。

【ユーベル・ファウスト（魔術師）】

元アメリカ陸軍特殊戦闘部隊『サーカス』に所属した古参兵。
シルクハットに燕尾服という古めかしい格好をした老紳士。
コードネームに「魔術師」を与えられた手慣れで暗殺を得意とする。

【ジョン・ウェイン（道化師）】

元アメリカ陸軍特殊戦闘部隊『サーカス』に所属した古参兵。
紫アフロに派手なメイクで、子供達に絶望と恐怖を与える殺人ピエロ。
コードネームに「道化師」を与えられた爆発物の専門家。

【グラン・ギョニール（傀儡師）】

元アメリカ陸軍特殊戦闘部隊『サーカス』に所属した女性兵士。ガスマスクで常に顔を覆い隠し、少女人形を使役する。コードネームに「傀儡師」を与えられた包囲殲滅戦のプロ。

【ライザ・アプサラス（踊り子）】

元アメリカ陸軍特殊戦闘部隊『サーカス』に所属した少女兵士。軽装かつ露出が多い格好と二本のククリナイフが特徴のジプシー。コードネームに「踊り子」を与えられた近接格闘戦のスペシャリスト。

【レナルズ・ウォーリア（団長）】

元アメリカ陸軍特殊戦闘部隊『サーカス』を創設したアメリカ軍の元大佐。二度の大戦で数々の作戦を成功させ、アメリカを支え続けた英雄的人物。正義と理想のために戦い、第四次大戦末期に戦死した。

■六笙商会

【劉宗一】リュウ・ソウイツ

中国マフィア『六笙商会』の社長にして『黒龍会』の若手武闘派幹部。飄々とした性格の女好き。元殺し屋の愛人二名を護衛にしている。

【蘭華・蓮華】ランファ・リンファ

劉の愛人でボディガードの姉妹。姉が蘭華で妹が蓮華。ハニートラップを専門とした殺し屋をしていたが、劉に拾われてから廃業した。

【秋一飛】シュウ・イーフェイ

六笙商会の副社長で劉と義兄弟の杯を交わした弟分。武装警察の出身で劉の懐刀として仕えている。

■ 関東誠真会

【帝釋 正眼】 タイシヤク ショウゲン

旧日本国防陸軍の元大佐にして、関東誠真会の会長。

『烈火旅団』と呼ばれた第7義術化旅団を率いた極右思想の国粹主義者。

【鬼島 一誠】 キジマ イッセイ

旧日本国防陸軍の元中佐にして、関東誠真会の副会長。

第7旅団で「仏の鬼島」と呼ばれる人格者だが、敵には冷酷無慈悲な鬼と化す。冷静な思考と判断力から参謀として組織のまとめ役を担っている。

【仲神 八千代】 ナカガミ ヤチヨ

旧日本国防陸軍の元中佐にして、関東誠真会の副会長。

第7旅団で「鬼の仲神」と呼ばれる鬼神的存在だが、頭を使うのは非常に苦手。男勝りな姐御肌で部下の信頼も厚いが、恋人の鬼島に対しては弱い。

■ワルシヤワゲート

【ロディオン・ガルイーニン】

ワルシヤワゲート日本支部のボスでロシア陸軍スペツナズの元大佐。「ロシアの大山猫」という二つ名を持ち、二度の大戦を見事に生き抜いた。第五次大戦でアメリカ軍と再戦できる日を心待ちにする戦争中毒者。

【ナタリア・クライン】

ワルシヤワゲート日本支部の副支部長でロシア陸軍スペツナズの元大尉。ロディオンの愛人で絶対の忠誠を誓っている金髪美人。

〔義術医療〕（ぎじゅついりょう）

損失した患部を人工部品へ置き換える代替医療。「義術」と省略するのが一般的。脳と脳幹を除く人体の九割を人工化させる全身義術化は俗にサイボーグ医療と呼ぶ。外科医の八倉甚により開発され、多くの難病患者や傷痍軍人の治療に貢献した。義術化の施術や負傷箇所の修復などを行う専門医を『義術医』という。

〔特殊工作員〕（とくしゅこうさくいん）

軍情報部や参謀部に所属する非正規戦専門の工作員。諜報活動、要人暗殺、破壊工作、敵地潜入など分隊規模か単独で作戦行動に当たる。情報分析官のサポートを受け、諜報員と工作員の両方を兼ねて動く実動要員。日本国防軍にしかない兵種であり、海外では準軍事担当官と呼ばれる。

〔義術強化兵〕（ぎじゅつきょうかへい）

第四次大戦から登場した全身を義術化した兵士のこと。

特殊部隊などに所属する兵士は、ハイスペックパーツを使用していることが多い。義術強化兵、義術強化猟兵、義術機甲兵、義術特殊兵の四種類が存在する。

〔義術兵装〕という軍用部品を使用しており、各部品に様々な機能を備えている。

〔自律兵器〕（じりつへいき）

第三次大戦で戦場の主役となった人工知能搭載兵器のこと。

人間の脳をモデルとする人工知能を積んでいるが性能は実物に遠く及ばない。

戦車や航空機から人型ロボットにまで応用され、様々な無人兵器が生まれた。

義術の開発により、第四次大戦から戦場の支援機と位置づけられるようになった。

「顔無し事件」(かおなしじけん) (Black Dogs)

『顔無し』と呼ばれた日本新政府の工作員が『一〇一文書』奪取を画策した事件。

八倉直人の両親が隠匿した一〇一文書には、旧日本政府と第四次大戦の真相が書かれており、その内容を世に公表することで顔無しは新政府の転覆を目論んでいた。

しかし、非正規戦部隊の『亡霊部隊』とともに八倉直人の手で抹殺されている。

最終的に八倉直人と取引したロシアマフィア『ワルシャワゲート』が各種特権と引換えに日本新政府へ文書を引き渡すことで事件は終息した。

「教団事件」(きょうだんじけん) (Black Dogs 2)

カルト教団『殺戮教団』が複合麻薬で信者を操り、六笙商会に戦争を仕掛けた事件。

六笙商会の麻薬市場乗っ取りを発端とした事件だが、その裏ではCIA準軍事担当官のハーティ・エヴァレットによる大規模な人体実験とデータ収集が目的だった。

御堂翡翠を含めた大勢が複合麻薬で操られていた。八倉直人とエルヴィの活躍で教団は壊滅したが、ハーティ・エヴァレットの行方を掴めないまま事件は終息した。

Black Dogs 3

「地獄は、名誉・義務・正義、その他の怖ろしい徳の故郷なのだ。地上の悪事はすべて、
こういう名のもとに犯される」

劇作家 ジョージ・バーナード・ショー

プロローグ

神近梓は澄んだ冬空を見上げて呟いた。

「ホント、正義って言葉は便利よね。どれだけ醜いモノも綺麗に隠せるんだから」
ガソリン臭と硝煙の入り混じる埃っぽい乾いた風に吹かれ、ゆらりと立ち昇ったドライシガールの煙が流される。アーモンドの香りが淀んだ空気を覆い隠すように漂った。

「いつだって、ここじゃクソ野郎が善人面で叫んだ。正義と自由、国家を守るために戦おうってね。んで？　ここが正義と自由が守られた理想郷？」

ゆっくり紫煙を吐き、ぐるりと辺りを見渡す。コンクリートと鉄骨で作られたバリケードが跡形もなく吹き飛び、スクラップ同然の戦闘車両が横転したまま燃えていた。

それらの後方に正面扉の失せたビルが建っている。ようやくエントランスに立ち込める粉塵が消え、折り重なるように倒れた死体のはっきり見える。

どれも例外なく爆風が巻き上げる破片で衣服を切り裂かれ、千切れた手足や胴体を冷たい外気に曝している。炎に焼かれ続ける死肉は、悪臭を放つ汚物と化していた。

バリケード内の様子もそう大きく変わらない。大量の血をぶち撒けた亡骸が下っ腹から臓物をはみ出させ、わざわざ数えるのも面倒なほど転がっている。

ここで死んでいる者の大半が、義術強化兵と呼ばれる元軍人の傭兵だ。

西暦二〇四二年現在、人間の体は脳と脳幹以外を人工部品へと置き換えられる。一般的にはサイボーグ医療として知られ、義術あるいは義術医療と呼ばれていた。

その義術医療で生み出された兵士を義術強化兵という。義術強化兵の化学血液は人工赤血球の影響で赤くない。その証拠に骸はどれも赤銅色の血で濡れていた。

うんざりするほど見慣れた光景だ。噓せ返るような硝煙と腐肉の放つ甘ったるい死臭が懐かしい。神近が乗って来たジープのボディへ背を預けて失笑を漏らした。

「正義や愛国心も言葉はご立派だけどね。そいつは安菓子のおマケと変わりやしないよ。パッケージは綺麗でも不細工だし、肝心の菓子も甘いだけでロクな味がしない」

神近はチェストリグという戦闘用ベストを野戦服の上に付け、濃緑色な軍用ロングコートを羽織っている。ズボンの両腿にはバンドでナイフとホルスターが巻いてあった。

AK-12自動小銃を運転席のシートから掴み取り、ベネリM4散弾銃を助手席のシートから手元へ引き寄せる。二丁のコッキングレバーを引いて初弾を薬室へ送った。

「ま、どんな理想を掲げてようが、傭兵は金さえ貰えりゃいいのよ。傭兵ってのはクライアントの支払う金だけが正義なんだから。アンタ達もそう思わない？」

ビルのエントランスに重い足音が反響した。人種も装備も統一性がない傭兵の男達が駆けて来る。各々が使い込んだ機関銃や自動小銃の銃口を神近へ合わせた。

神近は束ねた黒髪を背に揺らして振り返る。ナイフを銜えた黒いシベリアンハスキーの部隊章を付けたコートの裾をはためかせ、すっかり先の短くなった煙草を踏み消した。

「クソつたれな地獄へようこそ。歓迎するよ」

マズルフラッシュが一斉に瞬いた。ドラムコールのような銃声が大気を震わせ、空薬莖が死体と床を叩いて跳ね回る。神近が弾雨の中で散弾銃のトリガーを引いた。

エントランス中央、M240汎用機関銃を構える男の頭が爆ぜる。べしやつと脳漿と骨片の混じった血肉を浴びた数人が悲鳴を上げた。轟音が続けざまに次弾を吐き出す。

12ゲージの九粒弾が壁伝いに逃走しようとした男の顔を破裂させた。鼻柱から額までが吹き飛び、飛沫かせた体液と肉片で壁を汚しながら頽れる。

神近が眉尻を下げ、わざとらしく両肩を竦めて見せた。

「アンタ達の選択肢は二つ。先にくたばったお友達の後を追うか。あたしを殺すかだ」

AK-12自動小銃を握った右手を真横へ向けるなり引金を絞る。フルオートで銃弾が吐き出され、車両裏から狙っていた男の鼻梁と左目を抉り潰した。

脳を掻き回した銃弾が後頭部を貫いた。ビクツと大きく肩を震わせ、男が右目を瞠ったまま仰向けに倒れる。神近は自動小銃の銃身を肩に載せて歩きながら喋った。

「どうしたの？ 殺るか殺られるか。単純でわかりやすいでしょ？」

尖った犬歯を剥いて嗤う。それは傭兵達に獰猛な肉食獣を彷彿とさせた。柔らかな獲物の喉笛へ食らいつき、鋭い牙から生き血を滴らせる黒い狼犬の貌である。

傭兵達の第六感が警鐘を鳴らした。その場にいた誰もが恐怖に突き動かされ、無我夢中でトリガーを引く。張り巡らされた銃火を易々と潜り、神近は左右二丁を発砲した。

5・56ミリNATO弾が玄関右側にいた男の下顎を割り潰す。薄っすら黄ばんだ体液で濡れた弾丸が延髄を貫通した。間欠泉のごとく血を噴き、男は千鳥足で崩れ落ちる。

別の傭兵が反対側で顔の左半分を散弾に砕かれ、虚空へ弾をばら撒きながら息絶えた。

神近がベネリM4散弾銃の吐き出した赤色のシェルケースを爪先で蹴り除ける。

傭兵達の間に行き病のごとく恐怖が蔓延していた。彼らは兵士として何度も戦場に出た経験はあっても、パニッシャーじみた女を殺す訓練を受けた経験は一度もない。

そもそも、どこかのマヌケがビルへ近づいたら、バドワイザーの瓶を片手に射撃ゲームをする簡単な仕事のはずだった。ところが、どこで何を間違えたのか、自分達がマヌケな的として射殺される側になっている。女傭兵に撃たれて死ぬだけの簡単なお仕事だ。

神近がエントランスに踏み入る。茶髪の青年が悲鳴を漏らして逃げ出した。

その右足を散弾で吹き飛ばす。バランスを崩した青年は壁へぶつかり、激痛に咽び泣きながら床を転がった。神近は呆れ顔で一瞥した後、止めを刺さずに放置した。

「……つたく、どいつもこいつも人の顔を見て逃げるんじゃないよ」

と、受付カウンターの裏から銃口を見せた男の額を一連射で破壊する。ポーンと間の抜けた音がエントランスに響いた。神近が怪訝な顔つきで視線を左へ運んだ。

「今だ！ 行け、行けッ！」

男達がカウンターの裏から飛び出し、扉の開いたエレベーターに殺到した。操作盤前の男は「さっさと乗れ！」とか「早く閉まれ、クソ！」とボタンを無駄に連打する。

神近が口角を上げ、散弾銃の引金を連続で絞った。坊主頭の男が乗り込もうとするも、太股の付根を鉛玉に叩き切られ、エレベーターの入口半ばで顔を打って転ぶ。

さあつと男達の顔から一斉に血の気が引いた。

大概のエレベーターは安全のため、ドアセンサーが付いている。そのセンサーが坊主男の胴体を検知するなり、途中まで閉めていたドアを再び開き始めた。

坊主男は助かりたい一心で頭を上げ、操作盤前の男が振り下ろしたRk95自動小銃のストックで額を割られた。周囲も必死の形相で坊主男の体を無茶苦茶に蹴る。

「やめ、やめてく、ぐぶえっ」

「ふざけんな！ 俺達まで巻き込むじゃねえ！」

「さっさと降りろ、ブタ野郎！ お前一人で死にやがれ！」

「……た、頼む！ 俺も乗せてくれッ！ 助け——」

無精髭の目立つ男がM16A2自動小銃で坊主男の頭頂部を撃ち抜いた。坊主男は鼻血と涙で汚れた顔を強張らせて沈黙する。無精髭の男が唾を飛ばして怒鳴った。

「おつむのイカレた雌犬に殺りたいのか？ さっさと放り出せッ！」

だが、坊主男を蹴り出した男達は今度こそ青褪めた。AK・12自動小銃のアンダーレールに発射口がある。神近がGP・30グレネードランチャーのトリガーを引いた。

男達が我先に逃げようと押し合った。40ミリグレネード弾が呆気なくドアの間をすり抜ける。直後、ドアが爆圧で外側に拉げ、血臭混じりの粉煙を立ち昇らせた。

自動小銃をスリングで肩に引っかけ、ほとほと嫌そうな顔でぼやいた。

「やれやれ、これじゃ行きも帰りも階段じゃないの……」

非常階段を使うため、受付カウンターの右斜め後ろに見える廊下へ足を向ける。

そこに引き摺ったよな血痕が続いていた。右手で散弾銃を持ち、適当な死体から手榴弾を拝借。セーフティピンを引き抜き、親指で起爆クリップを握って進む。

どこかで見たような茶髪青年が倒れている横を過ぎ、階段を上り始める。青年が安堵した表情で起きたとき、MK3手榴弾がカツンと段差を跳ねて目前に転がった。

「ひっ——」

哀れな悲鳴を炸裂音が掻き消した。神近は踊り場で煙草を啜え、愛用のジツポライターで火を点ける。すつと細めた両目で階上を見据え、皮肉げな笑みを浮かべた。

「それじゃ、後始末を始めようか。ご立派な正義ってやつだね」

第一章

1

——義術により脳以外を人工化した人類が当たり前となった時代。世界的な都市の大半が瓦礫と廃墟に変わっても、そこから人々の営みが消えてなくなることはなかった。

ひどく静かな夜だ。ついさっきまで晴れていた空が灰色の雲に覆われ、より色濃い闇へと都市が呑まれていく。八倉直人は狙撃スコープを覗きながら独り語ちた。

「嵐の前の静けさつてところだな」

人の声はおろか心配すらない。これから起こる変事を恐れ、早々に逃げ出した後のような雰囲気すら漂っている。携帯ラジオの音だけが堂々と静寂を無視し続けていた。

「この十八年間に人類は二度の世界大戦を起こしました」

直人はじつと標的が現れるのを待ち続ける。スコープに暗視装置が備わっているおかげで、夜闇が徐々に増していく中にながらクリアな視界を確保できていた。

「第三次大戦は核と自律兵器の戦争でした。各国が資源とエネルギーを奪い合い、米露が小諸国の併合で砲火を交えました」

スコープの倍率は八倍、レンズにレティクルという十字線と小さな定点がある。ミルドットと呼ばれる点だ。ミルドットで距離を測り、レティクルで標的に照準を合わせる。

「第四次大戦は義術の戦争でした。兵士が機械の肉体を持ち、東アジアを主戦場にした総力戦です。同時に、卑劣な敵国へ我が国が正義を突きつける戦争でもありました」

十二階から見える廃墟の都は、瓦礫ばかりが延々と続く荒野である。初冬の底冷えする乾いた風が砂塵を舞い上げ、過去の栄華を主張する残骸へ無慈悲に降りかかった。

「あの大战で我々日本人は多くを失っています。東京を始めとした都市の大半が焼かれ、総人口の三分の一が無残な死を遂げました。そうした悲劇を繰り返さないためにも、我々は強い日本の復興を急がなくてはならないのです」

情報通りなら、標的の到着はそろそろのはず。引金に指を掛け、意識のスイッチを切り替えるように深呼吸をひとつ。強張った全身を解しつつ適度な緊張感へ身を委ねる。

直人はAS50対物狙撃銃を伏せた体勢で構えていた。伏射という命中精度を得やすい射撃姿勢だ。右頬を頬当てにつけ、ストックを脇下で挟みながら押さえる。

アキュラシー・インターナショナル社のAS50は、12・7ミリNATO弾を使用するセミオートモデルだ。装弾数は五発と少ないが、命中精度が高い狙撃銃であった。

「再び強い日本を取り戻そう！ 平和で豊かな社会を実現する政党、自由国民党です。日本新政府広報が二十三時をお知らせします」

飽きるほど聞いた時報が鳴った。スコープには瓦礫の散在する穴だらけな道路が映り、ビル群が倒壊寸前そのまま沈黙の中に聳えている。これが日本の首都だった東京だ。

スコープ内で複数の光点が揺れ動き、砂利や埃を巻き上げる車列が見え始めた。

「ほぼ時間通りのお出ましか」

ようやく標的の到着だ。車両は計六台、LAVの略称から「ラヴ」の愛称で知られる軽機動装甲車四台の両側を「クーガー」と呼ばれる96式装輪装甲車二台が固めている。

どれも旧日本国防陸軍に配備されていた純国産の軍用車両である。直人は思わず失笑を漏らした。今回の標的、関東誠真会の国粋主義は噂通りの筋金入りらしい。

直人はハンズフリーの通信機を首下に付けている。声帯の振動を拾うことでクリアな通信を可能とする骨伝導式の軍用装備だ。神近の含み笑いが右耳のイヤホンから流れた。

『――日の丸でマスを搔くのが大好きな連中を派手にイかせてやりな。攻撃開始』

ゆっくり息を引き取るようにトリガーを絞る。鼓膜を殴りつけるような轟音が鳴り、銃口から弾丸が飛び、フラッシュハイダーに減退された発砲炎が瞬いた。

大人の指より太い空葉莢が排莢口から吐き出される。発射ガスの影響で、直人の周囲を砂埃が舞い上がった。音速を超えるポートテイル型のライフル弾は、狙い通り、先頭車両のフロントガラスを貫く。ラヴの運転手は水風船のごとく頭を破裂させた。

コントロールを失った車両が路端へ突っ込む。全車一斉に急ブレーキをかけた。ドアやハッチを蹴り開け、自動小銃を持つ野戦服の男達が素早く展開し始める。

「なるほど。腐っても元第7旅団ってわけだ。動きは悪くない」

関東誠真会の中核を成すのは、高火力を用いた攻撃型の戦術で中国軍を常に蹂躪することから「烈火旅団」と畏れを込めて呼ばれた旧国防陸軍所属の第7義術化旅団である。

この旅団の指揮官は帝釋正眼という旧国防軍の元大佐だ。帝釋は戦中から右翼思想の人物として知られており、日本こそアジアの盟主であるという大日本主義を掲げていた。

彼の極右思想へ同調する軍人は意外にも多い。日本と外交や移民問題で火種を抱えていた中国、南北朝鮮による無差別都市攻撃が、第四次大戦の戦端を開いたせいだ。

大戦の引金となった一〇一事件は日本人人口の約三分の一を死へ追いやり、関東圏や地方の都市部、各工業地帯を含めた国土の約八割を三十分で壊滅させた。

大戦中、日本は首都を宮城県仙台市へ移行。アメリカの軍事支援を受け、中国、南北朝鮮軍との全面戦争へ突入する。戦火は伝染病のごとく世界中へ瞬く間に広がった。

そんな第四次大戦は皮肉なことに勝者がいない。疲弊した国土と瓦礫の都市群だけが、身を削るような総力戦の果てに残った。当然、これは日本に限った話じゃない。

アメリカとロシアのような大国ですら、今は痩せ細った野良犬のような有様だ。戦後、日本新政府は首都を据え置き、被害の少ない東北六県以外を切り捨てた。流入難

民規制法案を作り、閉鎖政策を行うことで国家基盤を維持している。日本に限らず、世界中の国家が似たような政策を実施していた。入国できなかった被災

難民は放棄された都市へ集まり、暴力と欲望が渦巻く無法地帯で日々を生きていた。東京もマフィアや軍人崩れの武装組織が、旧二十四区を目安に支配圏争いを繰り広げて

いる。麻薬売買や売春など当たり前、ここは悪徳が服を着て歩くような場所なのだ。帝釋のような思想を支持する者達は、第四次大戦について口を揃えてこう語る。愛国心

に基づいた正義の戦争。それを聞くたびに直人は反吐が出そうだった。愛国心と正義を掲げた戦争ほど本質はロクでもない。コンビニ弁当に喩えるとわかりや

すいだらう。化学調味料で旨味をつけ、添加物をたっぷり使って見目を綺麗に保つ。

そんな弁当はさぞ「美味そう」に見えるはずだ。だが、どんなに食欲をそそるメニューでも身体に悪いという本質だけは変わらない。先の大戦も同じようなものだ。

直人の指が再びトリガーを引く。右側クーガーの上部ハッチから身を乗り出した男の首を吹き飛ばした。銃弾が鎖骨辺りへ食らいつき、頭と胸部を一瞬で破壊。飛び散った血肉がボディを濡らす。左の同型車が車両上部の40ミリ自動擲弾銃を旋回させた。

「レイヴン。そっちは任せていいか？」

『大丈夫。私がやるから』

対戦車ロケット弾が細路地から放たれ、左車両のボディに突き刺さる。クーガーが傾いたまま跳ね上がり、爆炎を噴きながら横転した。火達磨の乗員が外へ放り出される。

「クソ！ どこからだ？」

「被害報告急げ！ 動ける者は中佐の車両を守れ！」

男達は見えない敵に怒声を上げ、怪しいと思われる場所へ銃撃を加える。

レイヴンが先の細路地から弾丸のごとく飛び出し、クーガーの残骸を足蹴に降り立つ。彼女の黒いショートヘアと褐色肌が、炎の照り返しで夜闇に浮かび上がった。

「いたぞッ！」と男達が89式自動小銃改のフルオートを見舞う。レイヴンは路面を這うような疾走で銃火を避け、左手に握った拳銃型の小型火器をラヴの車体へ向ける。

HK69A1グレネードランチャーだ。H&K（ヘッケラー&コッホ）社の中折れ式擲弾発射器であり、装弾数は40ミリグレネード弾一発。レイヴンがトリガーを引いた。

パシユッ！ 独特な音とともに多目的擲弾が放たれ、ラヴのボンネットを食い破る。
「総員退避ッ！」

男達が青褪めた顔で逃げようとするも遅い。車体が爆発で一メートルも浮き、窓ガラスやドアを散らして落ちる。運悪く巻き込まれた数人の悲鳴を破壊音が塗り潰した。

レイヴンがHK69A1を投棄するなり、ヒップホルスターから愛銃を抜く。ピエトロベレッタ社製のベレッタM93Rだ。マシンピストル二丁の銃口が発砲炎に瞬いた。

9ミリパラベラム弾の三点バーストが、果敢に応戦しようとした男の額を貫通する。

弾丸に食い破られた後ろ頭から血と脳漿が噴き出す。レイヴンは即座に次の獲物へ肉薄した。男二人が顔を引き攣らせ、自動小銃で頼りない弾幕を張る。

「ちよこまか動きやがって！」

「クソツタレが！ どこでもいいから当たれッ！」

レイヴンは二人を通り過ぎるまで撃ち殺す。男二人は鼻柱や眼球を銃弾に挟り抜かれ、その場で力なく頷れる。ベレッタ二丁のスライドが後退して止まる。弾切れた。

空弾倉を落としたとき、視界の右端で人影が動いた。レイヴンが二丁を手放し、すぐ側に斃れた男の戦闘用ベストからナイフを奪う。すぐさま右斜め後ろへ投擲した。

ヒュッ！ と風切り音が響く。気づいて振り向く男の額に深々と刃が刺さり、怪鳥じみた断末魔を残して絶命する。レイヴンは悠々と銃を拾って予備弾倉を叩き入れた。

『心配しなくていい。ちゃんと気づいてたから』

「みただな」

『でも、心配してくれるのは嬉しい』

「……いいから周りを見る。まだ終わってないんだぞ」

まったく、とAS50対物狙撃銃の照準を先の男から外した。

レイヴンは傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の傭兵で元軍人だ。過酷な死地を潜り抜けた経験を持つ強靱な兵士であり、神近に戦後も付き従う元走狗部隊の一員である。

そろそろ頃合か。直人が視点を車列へ移すと案の定だった。三台のラヴが味方を置き去りに離脱を図ろうとしていた。大男が廢ビルから飛び下りて進路上に着地する。

瞬間、突っ込んで来る先頭車両へ無駄のない右ストレートを打った。

黒い手甲のようなメリケンサックを付けた拳が車両を殴り飛ばす。左隣の一台も巻き込んで道路を転がり、古びたビルの一階へ減り込む。あらゆる銃声がピタリと止んだ。

「な、なんだコイツは……」

その場の誰かが呟いた一言は、全員の抱いた感想を端的に現していた。

一部始終を目撃した男達はおろか、レイヴンまで目を丸くしている。その気持ちは理解できる。ラヴの車重は四トン半。本来、人間の拳で殴り飛ばせる代物じゃない。

神近が堪え切れない様子で笑い出す。レイヴンは持ち前の俊敏さで気づかれることもなく細路地へ姿を消した。直人も呆れ顔で対物狙撃銃を背負って次の行動へ移る。

久間迅蜂は恐怖で言葉を失った男達を見据え、「おい、神近」と通信を送った。

「こいつらは潰してもいいんだな？」

『好きにしな。あたし達は後始末にかかるから手早くやんなよ』

久間は日本人の平均身長を遥かに上回る一九五センチの大柄な体格だ。徹底的に鍛え抜かれた肉体をしており、野戦服の上からでもわかるほど筋肉が盛り上がっている。

ぱつぱつと刈った前髪と一束に結われた襟足は先天的なアルビノで白い。瞳も色素が薄いせい限りなく赤色に見える。男達が「お終いだ」と恐怖に震え上がった。

久間の容姿を知らない旧国防陸軍出身者はいない。人民解放軍陸軍の一個大隊を単身で壊滅させた怪物だ。その戦いぶりと容貌から付けられた二つ名が「白狼」である。神近の返答を聞き、口角をわずかに上げた。

「そうか。なら、お前の要望通り手早く終わらせるとしよう」

目についた男との間を一息で詰めた。「ひいっ」と小さく怯え声を漏らす男の頭頂部から右拳を振り下ろす。ドンッ！ という衝撃と枯れ枝を折るような音が鳴った。

クレーター状の爆心地じみた路面に赤銅色の水溜りができている。久間が拳を上げると脳漿と残片が水音ともに剥がれ落ちた。男達が悲鳴を上げ、各々の銃を撃ちまくる。

久間は銃弾を平然と受けながら見回した。ざっと数えて残りは十四人。一人を三十秒で済ませば八分で終わる。そう考えながら右端に見えた男に左フックを打ち込む。

男は砲弾を食らったような速度で吹っ飛ぶ。廃ビルの壁面へ打ちつけた後頭部がべこつと陥没して即死する。奇妙な向きに目の飛び出た顔は、空気の抜けたボールのようだ。

「第7旅団も落ちたな。もう少し昔は歯応えがあったんだが……」

と、地面に叩きつけた三人目を踏み殺して嘆息する。路地裏へ逃げた数人を視界の片隅で捉えながら、何も見なかったことにして四人目を屠殺した。

■
荒鷹一郎は暗い路地裏で憤りを吐き出した。

「何故、私が薄汚い傭兵に背を向け、夜逃げ同然に敗走せねばならんのだッ！」

その怒声は護衛の重い足音すら掻き消すほど大きい。神経質そうな四角顔の眉間に皺を立て、漆塗りの鞆に収まった軍刀の柄を音が鳴るほど握り締める。

「今すぐ『本隊』を呼べ！ あの忌々しい売国奴どもを撃砕してやるわ！」

護衛の男三人がヒステリックな上官へ気づかれないよう溜息をついた。旧国防軍の濃緑色な軍服とタイトスカートを穿いた副官の女が困り顔で荒鷲を宥める。

「中佐。落ち着いてください。お気持ちわかりますが、今は——」

「プシュッ！」と空気の抜けるような音が鳴り、副官の右側頭部を貫通した5・56ミリ NATO弾がアスファルトを穿った。目を瞠った女の死体が力なく崩れ落ちる。

「上からだッ！」と見上げた護衛の男達の傍へ神近が降り立つ。「貴様っ！」と抜刀しかけた荒鷲の胸を正面蹴りで壁へ叩きつける。荒鷲の胸骨がミシッと嫌な音を立てた。

神近が凶悪な笑みを湛え、荒鷲の引き攣った鼻先へ顔を近づける。

「こんばんは。元中佐殿」

「……き、貴様、神ち、あぐあッ！」

神近のAK・12自動小銃が荒鷲の両腿を撃った。サプレッサーのせいで銃声は限りなく小さい。苦悶する荒鷲を見下げ、セレクトターをフルオートに変えつつ振り向いた。

「お勤めご苦労さん、元兵士の諸君。それじゃーね」

銃弾が護衛の顔を砕き割る。男三名が奇怪なダンスを披露しながら護衛の役割を果たすこともできずに絶命した。荒鷲が神近の膝を斬りつけようと逆手で軍刀を引き抜く。

神近のタクティカルブーツが荒鷲の右手首を踏み折った。路地裏に絶叫が響く。わざと靴裏で強く踏み躪り、神近が野戦服の胸ポケットから煙草の箱を出した。

「いやあ、昔から足癖が悪くて。すみませんねえ、元中佐殿」

荒鷲は激痛と屈辱に顔を歪め、「元中佐殿」と呼ばれるたびに眉尻をヒクつかせた。
「……神近……貴様、自分が何をしているのか理解してるのか……」

はっ、理解しております、と演技臭い口調で答え、土下座させるように荒鷲の頭を踏みつけ、顔で地面を磨かせる。煙草を咥え抜き、愛用のオイルライターで火を点けた。

「アンタをぶつ殺す前に一服してんだよ。理解できたかい？ 元中佐殿？」

爪先で額を蹴り上げ、荒鷲の口内へ銃口を突っ込む。荒鷲が神近と銃を交互に見やり、「神近！ やはり、貴様が——」と血走った眼で何かを言いかける。

神近が酷薄な瞳で引金を引いた。銃弾が咽奥を突き破り、脳幹を切り刻みながら後ろ首から貫ける。びしゃつと鮮血が放射状に広がり、荒鷲の四肢が数回ほど痙攣した。

ゆっくりと紫煙を吐き、銃身を上向けて振り返る。

「遅いじゃない。今しがた終わっちゃったよ」

直人が自動拳銃二丁を手に暗がりから姿を見せる。コルト・ファイヤーアームズ社製の
コルトM1991A1だ。装弾数は最大で八発、使用弾薬は45ACP弾である。

「そうじゃないかと思つたよ。んで、そいつが今回の？」

チラッと荒鷲の死体に視線を投げ、二丁を両腿のレッグホルスターへ収めた。神近が荒鷲の衣服で汚れた銃口を拭き、そのついでに首下の認識票を確認する。

「旧日本国防陸軍第7義術化旅団の情報参謀、荒鷲一郎。あたしも名前ぐらいは聞いたことがある有名人さ。いや、有名人だったと言うべきかねえ」

彼女は旧日本国防陸軍の元少佐であり、『走狗』と呼ばれた第113特殊戦闘部隊の指揮官だった。走狗の駆けた後には灰も残らない。旧国防陸軍では有名な噂である。

今の神近は傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の社長だ。危険な仕事も金次第で引き受け、どの誰だろうが金を払うなら加勢する。これがブラックドッグズの流儀だ。

彼女の實力は折り紙つきで、ナイフを銜えた黒いシベリアンハスキーの部隊章を見るだけで、大半の組織が死を覚悟するという。おかげで仕事に困ることがないらしい。

神近と表通りに向かう道すがら、げんなりとした表情で指摘した。

「それにしても、派手にやりすぎじゃないのか？ しかも、無駄が多い。一人殺すだけなら狙撃か拠点を吹き飛ばすだけで済んだだろ……」

ブラックドッグズの請けた仕事は「荒鷲一郎の殺害」だけだ。およそ四十名弱の構成員達は巻き添えを食ったにすぎない。神近が鼻で笑いながら吸殻を踏んだ。

「いやいや、ごもつとも。さすが、特殊工作員の暗殺者様は意見が厳しいねえ」

「——元特殊工作員だ。いい加減覚えろ、バカ少佐」

戦中、直人は旧日本国防軍の第307特務機関に属した特殊工作員だった。

数々の軍事工作与暗殺任務に就き、その冷徹さから「暗殺者」という二つ名で敵味方に恐れられていた。だが、当時の相棒であり、理解ある親友であり、初恋の相手だった女性。暗殺事件を機に軍を抜け、そうした過去やしがらみは全て捨ててきた。

神近は人を食ったような笑みを浮かべ、直人の鋭い目つきをあっさりかわした。

「そう怒るんじゃないよ。アンタの腕は買ってるんだし。あとは所属してくれりや文句無しなんだけどなー？ とーっても、ホワイトな超優良企業なんだけどなー？」

あからさまな営業スマイルで手を揉む姿へ呆れる気にもならない。ブラックドッグズの仕事は訳あって請けているだけだ。冷ややかな視線とともに突き放した。

「どの口で言ってるんだよ。一から十まで真っ黒なくせに……」

「なに言ってるんの。先月はちゃんと給料日に給料渡したでしょ？」

「……それが普通なんだよ。そもそも、俺が義術医だつてこと忘れてないか？」

「しようがないねえ。なら、衛生兵として所属するってのは？ どう？」

「お断りだ。ホント、昔から人の話を聞かないよな、あんた……」

直人の本業は義術医だ。義術化した人々を診る専門医であり、ある意味で各医療分野を網羅した人体のプロである。ただし、直人は免許を持っていないモグリの義術医だ。

とはいえ、師事した義術医の腕が良かったおかげで、直人の腕は評判が高い。その証拠に廃墟の東京を牛耳る組織から、毎日、絶えることなく依頼が持ち込まれていた。

神近が小さく肩を竦め、からかうように指摘する。

「まあ、いいさ。どうせ、レイヴンがいる限り契約は切れないわけだし？」

この悪徳業者め。神近を軽く睨みつけ、狭い路地を抜けた。レイヴンが二人を見つけ、正面のオフィス入口から近づいて来る。彼女は直人と同い年の二十一歳で、出身は東南アジア。豹のような猫科じみた目つきで直人を見やり、不思議そうに小首を傾げた。

「……怖い顔してる。どうしたの？」

「別に。大したことじゃないよ」

表情を和らげて誤魔化す直人の隣で、神近が何食わぬ顔のまま伸びをする。

「さあて、仕事終わりに一杯やって帰るわよ。アンタ達は？」

「あんたほど暇じゃないからな。遠慮しとくよ」

「私もいい。ナオトと帰る」

「……ちえ。どうせ、あたしは邪魔者ですよ。八倉、こいつを翡翠に渡しときな」

コート上のポケットからリモコンサイズの端末を出して投げ渡す。タップ操作の可能な軍用小型端末だ。神近が「じゃ、どうぞごゆっくり」と片手を上げて背を向ける。

直人が辟易とした表情で溜息をついた。相変わらず腹の内が読めない人だ。両親の友人だった神近とは長い付き合いだが、これまで一度たりとも考えを読めた例がない。

（結局、さっきの話もはぐらかされたままだしな……）

思い返せば昔からそうだ。のらりくらりと追求をかわす名人で、素直に教えてくれることのほうが少ない。とはいえ、重要なことなら隠さず教えてくれる人だ。やや疑問は残るが終わった話でもある。たぶん、彼女なりの言いたくない理由があったのだろう。

レイヴンが唐突に「えい」と直人の左腕へ抱きついた。野戦服越しですらわかるほど豊かな胸が包み込むように腕を挟む。直人が柔らかな感触へ焦りながら耳打ちした。

「……だから、そういうのは外でやるなってば……」

「ナオトは温かい。だから、今日は一緒に寝てもいい？」

「どうして、そういう話になるんだよ！」

「……嫌なの？」

じいっと見つめられ、直人が困り顔で頬を掻く。彼女は「顔無し事件」以来、診療所を兼ねた直人の自宅に住んでおり、他数人と家族のような共同生活を送っていた。

レイヴンは直人の理解者であり親友だ。だが、それ以上の関係へ踏み込んでいることもお互いに理解している。親友以上恋人未満という曖昧な関係が今の二人だった。

レイヴンは吐息がかかる距離まで顔を近づけ、拗ねたように唇を尖らせた。

「ふーん、私の添い寝はダメでエルヴィの膝枕はいいんだ」

どう弁明しても墓穴を掘りかねない。無言の圧力に負け、頬を掻きながら答えた。

「……一言も嫌だなんて言っていないだろ」

「本当？」

「当たり前だ。馬鹿」

レイヴンが照れながらも嬉しそうに微笑む。そういうところは可愛いものにな、と内心で苦笑しながら胸中で深く項垂れた。これじゃ、あの人の思惑通りじゃないか……。

ふと妙な気配を背後に感じて足を止める。レイヴンが目を瞬かせた。

「どうしたの？」

直人は右手で拳銃のグリップを握り、素早く視線を走らせる。廃墟の入口、屋上、各階の窓際、路地の入口——怪しい場所を全て確認したものの人影すら見つからない。

気のせいかな？　ほんの一瞬、間違はなく誰かに意図して見られていた。わずかだが気配もあった。冬の夜気とは違う冷たい殺気を纏った何者かを確かに捉えたのだ。

「ナオト？」

「……悪い。何でもねえよ。ほら、帰るぞ」

レイヴンの頭を優しく撫でてやり、直人は辺りを再確認してから歩き出した。

ラッセル・クライムバードは脈絡もなく語り始めた。

「ビジネスでは大切なことが三つある。何だかわかるかね？」

黒檀の机へショットグラスを置き、背にしたキャビネットの扉を開ける。ずらりと並んだ酒瓶の中から四角いボトルと青いラベルが特徴的なウイスキーを選んだ。

「まずは資金だ。酒を飲むにも女を買うにも金がいる。ビジネスだってそうだ」

太い栓を抜き、透明なグラスへ琥珀色の中身を注ぐ。銘柄はジョニー・ウォーカーのブルーラベル。五、六十年熟成したウイスキーを多数ブレンドした高級品である。

ラッセルは中程まで入ったグラスを手にボトルを置いた。

「次に客から愛されること。客に愛される商人は必ず成功する。君だって愛おしい女の子料理なら喜んで食べるだろう？ そうやって愛されながら人脈を作るんだ」

アンティークなデザイン椅子へ腰掛ける男が部屋の中央にいた。両膝に肘をつけて手を組み、前屈みで貧乏揺すりをしている。落ち窪んだ両目で床を見つめて呟いた。

「……俺は悪くない。俺は何も悪くないんだ……」

年齢は三十代前半ぐらい、穏やかな印象の奥二重が特徴的な日本人だ。ほんの数週間前まで親しみやすい雰囲気として知られていた顔は、すっかりやつれて見る影もない。

一方、ラッセルは五十代半ばとは思えないほど肌の色艶が良い。でっぷりした下っ腹を白い高級スーツで隠し、サーモンピンクのシャツの首下に黒ネクタイを締めている。

オールバックにした茶髪は額から禿げ上がっているが、肉づきのよい丸顔なせいでチャームイングにも見える。イメージはアメリカカンギャングのアル・カポネに近いだろう。ギラついた青い瞳で男を見下げ、弛んだ頬肉を揺らして強調する。

「そして、最後が一番重要だ。ビジネスの可否はこれで決まると断言してもいい」

「……仕方なかったんだ。俺は悪くないんだ、仕方がなかったんだ……」

「ビジネスで最も大切なのは信頼関係だ。友人や恋人、家族だつてそうだろう？」

お互いの信頼があるから愛情や友情という曖昧な通貨で関係が成立する。ビジネスの場合は成果と報酬という目に見える物証で成立するわけだ。いや、実にわかりやすい」

「もう十分だろう？ 解放してくれ！ 俺は言われた通りにやっただんだ！」

どこまでも二人の会話は噛み合わない。ラッセルは芳醇な香りと濃厚な風味のウイスキーを舌で転がすように味わう。男は今にも掴みかかりそうな勢いで唸った。

黒革張りの椅子へ尻を埋め、グラスの中身を揺らして続ける。

「今回、私はひどい損失を被ってしまった。金、人脈、信用、全てにおいて無視できないダメージを負ってしまったんだよ。君は忘れているようだがね、ミスター・ヒュウガ」

男がビクツと両肩を震わせた。ラッセルは酷薄な瞳でグラス越しに男を見据える。

「チヨダの件は最悪だった。ああ、もちろん！ わかっているとも。君だつて間違ひなく被害者だ。あの忌々しい雌犬に大切なビジネスを台無しにされた仲間だとも」

被害者、仲間、という単語を聞き、わずかな希望へ縋るように男は顔を上げる。人の良さそうな笑みを張りつけ、ラッセルは胸の前で両手を広げて見せた。

「ただ、ビジネスである以上は損失の責任を誰かが取る必要がある。だが、私は君が知る誰よりも優秀な経営者だ。だから、君に名誉回復のチャンスを与えたのだよ」

「そんなことはわかっている！ あんたの言う通り、俺は仕事をした。本当だッ！」

瘦せ犬じみたヒュウガは必死に訴える。その形相は釈迦の垂らした蜘蛛の糸を掴もうとする地獄の亡者を彷彿とさせた。ラッセルが室内にいる別の男へ矛先を向ける。

「どうなんだね？ サミュエル」

机から見て左側の壁に瘦身の麗人が佇んでいた。

「必要な確証は押さえてあります」

サミュエル・アンダーソンはネイビーブルーのスーツを自然に着こなし、ワインレッドのネクタイを締め、薄茶色のコートに黒い皮手袋という格好をしていた。

ヒュウガと同じく年齢は三十代半ばぐらい。肩まで伸びた甘栗色の髪を額で両分けにしており、ほっそりとした中性的な顔立ちに薄っすら影が差していた。

タブレット型の端末へ髪と同色の瞳を向け、二重瞼の目尻を微かに細めた。

「これ以上、その男に使い道はないでしょう。もう十分かと」

「そうか、そうか。君が言うなら信じるとしよう」

サミュエルは「恐れ入ります」と浅く腰を折る。二人の会話から与えられたチャンスを成し遂げたことを知り、ヒュウガはようやく安堵の表情を浮かべた。

サミュエルが対面の壁へ目をやった。飽きるほどやらされた仕事の時間だ。イレーナ・ウオーリアは背を壁から離し、この茶番劇を虚ろな瞳で眺める作業を止めた。

机の小皿からナッツをつまみ、ラッセルがグラスの中身を飲み干した。

「よくやってくれた、ミスター・ヒュウガ。私の与えたチャンスが無駄にならなくて本当に良かった。これで私も安心できるというものだ」

イレーナは野戦服の上着を肌蹴け、両脇へ下げたシオルダーホルスターから銃を抜く。プラスチックの角ばったフレームが特徴な自動拳銃——H&K社のグロック19だ。

ヒュウガは驚きを頭わに振り向いた。何の感情も抱いていない灰色の瞳とグロック19の銃口がピタリと頭を捉える。ヒュウガが動揺と怒りの入り混じった声を上げた。

「どういふことだ？ 俺は約束を果たしたぞ！」

空のグラスに酒を注ぎながら、ラッセルは口端を歪めて惚けた。

「おや、そうだったのかね？ 生憎、私は君と何かを約束した覚えはないんでね」

「ラッセルッ！ お前ッ！」

「ミスター・ヒュウガ。ビジネスで大事なことに四つ目がある。わかるかね？」

イレーナが左右二丁の引金を絞る。マズルフラッシュがヒュウガの瞳を染めた。

銃弾が呆気なく丸顔の左目と眉間を突き破る。火花のごとく鮮血が散り、人工頭蓋の中で暴れ回った弾丸が肉と頭皮を撒いて後頭部から貫ける。

「——契約していない相手とは対等な取引をしない。覚えておきたまえ」

絶望に両目を睜ったヒュウガが椅子から崩れ落ちた。イレーナは自動拳銃をホルスターへしまうと椅子を片付け始める。死体の処理まで含めてワンセットの仕事なのだ。

サミュエルとラッセルは彼女の存在を忘れたように段取りを確認していた。

「では、予定通りということでしょうか？」

「かまわん。さっさと進めてしまえ」

「かしこまりました。それでは早速、準備の場を整えるところにしましょう」
「それでいい。目障りな神近とブラックドッグズを処分するチャンスだ。あの雌犬どもを地獄に放り込んでやれ。いや、いつそ捕まえて雌犬らしく調教するのも悪くない」
耳障りな馬鹿笑いが響き、サミュエルが仄暗い微笑を湛えて一礼する。イレーナは一部始終を無感動な瞳で眺め、思い出したように死体を引き摺って部屋を後にした。

2

直人は診療所二階の一室でソファアールへ腰かけた。過去のカルテや義術医療の資料が眼前の事務机に積み上げられ、師である女医の少ない私物を埋もれさせている。

「こんな部屋があつたんですね……」

エルヴィは直人の右隣へ座りながら室内を見渡した。彼女の鮮やかな碧眼は興味津々といった様子で置かれた物や書類を眺めている。ボールペンを手に直人が苦笑した。

「先生がいた頃は診察室として使ってたんだ。今じゃ物置同然だけだね」

「ここで直人さんも勉強したんですか？」

「まあね。スパルタな鬼教官に小突かれながら猛勉強したよ」

自分を鍛えた女医は間違はなく鬼才の部類に入る。彼女の職人芸じみた施術は真似できないようなものじゃない。たぶん、あの領域には一生届かないだろう、と直人は思う。

その女医がいきなり旅へ出てから彼是一年。いったい、どこで何をしているのかさっぱりわからない。「直人さん？」とエルヴィに呼ばれ、意識を思索から引き戻した。

彼女はフレンチタイプのメイド服に身を包み、透き通るような銀髪を肩上ぐらいで切り揃えている。白磁器のような白い肌で、眉は面相筆で引いたように細く美しい。エルヴィが視線に気づいたらしく小首を傾げた。

「どうかしました？」

「えっ？ あっ、いや、何でもなし！ とりあえず、昨日の復習からやろう！」

その横顔に見惚れていたとは口が裂けても言えない。エルヴィは直人より四歳年下で、身長一六〇センチと小柄だが、ボディラインのバランスはレイヴンと良い勝負だ。

二人の決定的な違いは、相手に与える印象だろう。レイヴンは小悪魔的ながら包み込むような母性の特徴なのに対し、エルヴィは男の庇護欲と独占欲を刺激するタイプだ。

レイヴンが猫ならエルヴィは兎といったところか。目の前のセンチターテールへ用意していた辞書並に分厚い図表本を開き、直人は邪念を一掃するべく咳払いをした。

「まず、義術医療に使う部品は大きく分けて二種類。一つは民生品の義術部品、もう一つは軍用の義術兵装。この二つに分けられる。義術兵装の特徴は？」

「義術眼の暗視機能、人工皮膚の防弾機能、高密度の人工筋肉……ですよね？」

「正解。あとは高強度の人工骨や人工頭蓋なんかもある。まあ、そんな感じで義術兵装には色々な機能があるわけだ。これを知らないとは適切な施術ができないからね」

義術の治療は「施術」と呼ばれ、一般的な外科医療の「手術」とは区別される。

施術と手術の大きな違いは縫合の有無だろう。施術は患部を縫わない代わりに、人工皮膚の隙間から特殊樹脂を注入し、余分な樹脂を削ることで執刀箇所を塞いでいた。

エルヴィは大学ノートに色ペンなどを使って書き込んでいく。文字は母国語のドイツ語ではなく日本語だ。生前、ドイツ大使館の駐在武官だった両親に日本語の読み書きをみっちり叩き込まれたらしく、時折、直人ですら彼女の母国語を勘違いしそうになる。

「ちなみに機能を個別に強化することもあるんだ。例えば、久間大尉の皮膚は特殊繊維と樹脂のハイブリットタイプ。これは耐久性重視の極端な強化例だ」

「義術強化兵の種類によって強化内容は変わるんですか？」

「良い質問だ。エルヴィ、四種類ある義術強化兵のタイプをわかるだけ言ってくれ」

「一般的な義術強化兵、義術強化猟兵、あとは義術機甲兵まではわかりますけど……」

「ご褒美のつもりで彼女の頭を優しく撫でた。エルヴィは照れながらも嬉しそうに頬を染める。ボールペンを指示棒代わりに、直人が図表を指して解説し始めた。

「どれも基本はノーマルからの特化なんだ。義術強化猟兵は機動力、義術機甲兵は探知能力や電子戦能力の特化ってわけだ。だから、使用する義術兵装にも傾向がある」

ここで問題だ、と試すような笑みを口元に湛えた。

「どのタイプの義術強化兵にも共通する箇所は何だと思う？」

エルヴィは暫く考え込み、しゅんとした表情で首を横へ振った。

「答えは血液だよ」

「血液ですか？」

「そう。どのタイプも化学血液だけは強化や除外をしない。脳と脳幹は全身義術化したところで生身だろ？　そこへ負荷をかければ命に関わるからね」

義術化した人間の死因は脳死か失血死が九割を占める。いくら老化を遅らせ、ほとんどの病気に罹らなくなったとはいえ、義術化できない脳と脳幹だけは生身なのだ。

脳に血液を介して酸素が送られなければ酸欠になるし、知覚や呼吸と密接に関わる脳幹を破壊されれば即死は免れない。そういった意味で義術強化兵の弱点はわかりやすい。

「そもそも、血液は体内で物質を循環させるのに効率的なんだ。人型自律兵器も体内で血液に模した潤滑油を循環させてるしね。もちろん、油だから色は違うけどな」

「つまり、わざわざ完成されたシステムに手を加える必要はないってことですか？」

「そういうこと。まあ、弄るような点が無いってのもあるけどさ」

「あの、直人さん。あと一種類は何ですか？」

「直人が両目を細め、一拍置いてから口を開いた。
「義術特殊兵。ある一定用途専用で作られた義術兵装で構成されたタイプだな。ほとんど試作品に近いから、表に出してくることはまずありえない」

「でも、この前の神父様の身体は……」

「……ナノマシンボディか。アレも試作品じみた特殊な部類だよ」

彼女が「神父様」と呼ぶ男は二ヶ月ほど前に死んだ。『殺戮教団』というカルト教団の仕切り役をしていた男であり、ドイツの元工員として悲劇を背負った人物だった。

ラルス・アルベルト。彼は親友を救えなかった贖罪のため、その娘であるエルヴィの親友を手駒として利用した挙句、彼女に復讐と称して自らを殺させようとした。

それを直人は赦すことも看過することもできなかった。だから、暗殺者として救いとは程遠い死をラルスに与えた。しかし、彼を狂わせた原因は第307特務機関にある。

エルヴィの両親を無惨に殺害したうえ、ラルスの妻子どころか本人すらも抹消するべく画策した軍事工作。直接関わってなかったとはいえ、あの組織の一員だった事実が変わりはない。本当に裁かれるべきは誰なのか？　ここ最近、そればかりを考えている。

エルヴィがぼすつと直人の肩に頭を乗せた。

「直人さんは悪くありません。だから、自分を責めないでください」

内心を見透かされたような一言に思わず息を呑む。エルヴィは「教団事件」と呼んでいる事件で多くを学び、誰かに守られるだけじゃない人間へと大きく成長した。

直人の右手に指を絡めて身体を近づける。エルヴィの首筋から柑橘系の香水が匂って、奥深くに眠った官能を呼び覚ます。エルヴィは潤んだ瞳で上目遣いに見つめた。

「私だって直人さんの支えになりたいんです。……ダメ、ですか？」

エルヴィが目を閉じて顔を寄せる。直後、ドアが派手な音ともに開き、二人の少女が間拔けな悲鳴を上げて雪崩れ込む。レイヴンがドア口で引き攣り笑いを浮かべていた。

「そのドロボウネコ。表に出ろ」

「絶対に嫌です。お断りします」

直人の右腕へ抱きつき、ちろつと舌を出した。レイヴンは口端をヒクつかせ、戦闘準備をするように両指を鳴らす。数秒後の危機を回避するため、直人が先手を打った。

「……エルヴィ。コーヒーを淹れて来てくれ」

「今すぐですか？」

エルヴィの不満顔から目を逸らし、どうにか苦し紛れの言い訳を考える。
「えーと、ほら！　ずっと喋ってたから喉が渴いてて……だから、頼むよ」

「わかりました。ちよつと待つててください」

エルヴィが渋々といった様子で廊下に向かう。ドアが閉まった途端、激しい罵倒の応酬と明らかに殴り合つてるとしか思えない音や衝撃がドア板を震わせる。

直人は真正面に座つた黒髪の少女を睨みつけ、げんなりした表情で質した。

「……さて、御堂。言い訳があるなら聞こうか？」

日本人では珍しい翡翠色の瞳に不満を湛え、御堂翡翠がビシツと指さした。

「この甲斐性無し！ 優柔不断！ それでも男の子か！」

翡翠は例の教団事件に巻き込まれたエルヴィの親友だ。事件後から殺戮教団の打つた麻薬由来の薬物を抜く治療トリハビリのため、診療所唯一の入院患者として住んでいる。

今日の彼女は薄緑色のフリースセーターを着ており、その下に直人の物だったジーンズを穿いていた。親友より発育の良い胸の前で腕を組み、わかっちゃいないと首を振る。

「もう、見ててじれつたいんだよねえ。あんなに女の子がアピールしてるんだよ？ 貰つてくさいって言ってるんだよ？ 男の子ならそこは決めなきやダメでしょ」

「なんで、覗き見してたヤツが偉そうに説教してんだよ」

「うつ。そ、それはそれ。これはこれつてことで……」

ごによごによと言ひ訳する翡翠の隣で、金髪の少女が「はいっ」と手を挙げた。

「お兄ちゃん。ドロボーネコつて、どんなネコさん？ かわいい？ もふもふー？」

「サーニヤ。それは猫の種類じゃないから……」

サーニヤは十四歳のロシア人で大の動物好きだ。サファイアのような青い瞳と一束にまとめた金のセミロングヘアが特徴で、身長一四〇センチの小柄な体格をしている。

彼女は猫耳付きフードの黒いパーカー姿で、モスグリーンのホットパンツに黒のハイニールソックスという格好だ。黒い子猫のようだ、と外見を見るたびに直人は思う。

エルヴィを含めた三人は走狗部隊の元兵士であり、ブラックドッグズの傭兵であった。ちなみに、レイヴンと翡翠はレンジャー資格を持つ義術強化猟兵でもある。

そんな彼女達の過去は例外なく過酷だ。例えば、サーニヤは旧国防軍で記憶洗浄という洗脳処置を施され、精神年齢だけが六歳前後のままという後遺症を負っている。

レイヴンは彼女の保護者であり、姉のような存在だ。とはいえ、レイヴンと暮らすようになって以来、直人もすっかり保護者のな立ち居地になっていた。

サーニヤはしょんぼりした顔で寝転がり、翡翠の膝に頭を乗せて拗ねた。その小さな頭を撫でてあやしめつつ、翡翠が本音を探るような目つきで直人を見据える。

「どっちかを決めれなくて迷ってたりする？」

「……そういうわけじゃない。たぶん」

はつきりと答えられない理由は、恋愛感情とは別の問題があるせいだ。

直人にとって「顔無し事件」は復讐と亡霊を追う日々は終わらせる一夜の闘争だった。

だが、それで終わりじゃない。あの闘争の裏に潜んだ裁くべき敵が残っている。

八倉甚。直人と血の繋がった祖父であり、義術医療を生んだ元天才外科医だった。

終戦間際、軍の高官達より安全な場所にいたはずの男は忽然と姿を消した。行方はおろか生死すらも不明。一切の痕跡を残さずして天才は消息を断ったのである。

あの男には償わせるべき大罪がある。私利私欲のために数多の人命を奪い取った罪だ。八倉甚を裁かない限り、誰かの気持ちの応える資格はない、と直人は考えている。

そもそも、あの男を裁かなければ、昔の相棒に顔向けできない。自分の未来と命を犠牲にしてまで、隠された真実を暴いてくれた彼女の想いを無駄にしてしまう。

己の内から重苦しさを締め出すように息を吐いた。

「とにかく、御堂が考えてるほど単純な話じゃないんだよ」
ほうほう、と翡翠が頷き、知らぬ間に用意したメモ帳へ何やら書き加えている。

「つまり、八倉君の好みと胸囲の関係性は微妙、と。うーん、エルヴィのバストアップマッサージも無駄になりそう……やっぱり、既成事実作っちゃうほうが早いよね……」

直人が盛大に咽る。サーニヤは「キセージジツ？」と意味を理解できず首を傾げた。

「お前、エルヴィに何を吹き込んでるんだ！」

「何ってそりや、男の賢い攻略方法に決まってるじゃん。やだなあ、もう！」

「ねえねえ、ヒスイ。キセージジツってなーに？」

「おつ、サーニヤも興味ある？ 既成事実っていうのはね——」

嬉々として意味を教えようとする翡翠の額に、直人の投げた図表本が命中する。珍妙な呻き声を上げて仰け反り、おでこを押さえた翡翠は床をのた打ち回った。

「ぼ、暴力反対っ！ サーニヤが真似したらどうするの！」

「サーニヤ。お昼に好きなもの作ってあげるから真似しちゃダメだぞ？」

「はーいっ！」

「う、裏切り者お……」

サーニヤと情けなく突っ伏した姿に笑った。一ヶ月前まで禁断症状とフラッシュバックが見せる悪夢に魘されていた翡翠だが、ようやく以前の状態へ戻りつつある。

エルヴィから聞かされていた通り、彼女は元々明るく面倒見の良いムードメーカータイプの人物だったらしい。こうやって馬鹿をやるのも回復してきた証拠ではある。

唯一の誤算は彼女の性格が悪戯好きだったことだ。直人の好みや癖を数日で調べ上げ、レイヴンとエルヴィの仁義無き戦いにガソリンを注ぐ迷惑な放火魔と化した。

直人の好きな柑橘系の香水をエルヴィへ勧めたり、こちらが逃げられないよう利き腕側に座れと教えたのも間違はなく翡翠だろう。随分と厄介な影の策士がいたものだ。

彼女の観察眼は大したものだと思う。偵察や観測に優れたスカウトスナイパーらしい目の良さだ。だが、直人が右利きを装った両利きなことまでは見抜けなかったらしい。

特殊工作員時代からの抜けられない癖だ。これも敵味方に利き手を錯覚させて欺く技術のひとつである。味方すら敵になる可能性を考えろ。それが特殊工作員の鉄則だった。

まあ、この調子なら早めに退院させても大丈夫かもしれない。サーニヤによしよしと撫でられている翡翠を眺めて領き、カルテや処方薬を変更しに行こうと腰を上げる。

突然、サーニヤのパーカーから着信音が響いた。ピアノ調な「猫踏んじやった」の電子メロディ。サーニヤが「あつ、アズサだ」とポケットから小型軍用端末を出した。

直人が嫌そうに顔を顰める。大抵、神近は人手が足らないか、ロクでもないことが起きると連絡を寄越してくる。翡翠が苦笑混じりに首を振った。諦めるということらしい。

一方、サーニヤは無邪気に相槌を打ち、明るい返事を最後に通話を切った。

「アズサがレイヴンとエルヴィのこと呼んでたよ。たのしいザツヨウだつて！」
 どうやら今回の貧乏くじは二人が引いたようだ。エルヴィが名指しということとは家事炊事を含めた雑用だろう。レイヴンは武器類の後片付けや準備というところか。

直人は内心で安堵しつつドアを開けた。瞬間、「くたばれッ！」という物騒な雄叫びが聞こえ、レイヴンとエルヴィが見事なクロスカウンターで相手の頬を打ち据える。

思わず数秒ほど間抜けな面を晒してしまった。クロスカウンターが相打ちで決まる例は相当珍しい。どちらか片方に避けられることが多く、相打つ前に終わってしまうためだ。

二人が互いを蹴り飛ばし、すぐさま殴りかかる。直人が間に割り込むなり、レイヴンの右ストレートを掌底で弾き、エルヴィの左フックを立てた腕で受け流した。

「……神近さんが事務所に来てさ。それにしてもお前ら、本当は息ピッタリなんじゃないか？」

3

宵闇の暗さにも似た室内に、剣呑とした空気が流れていた。

アラベスク模様の紅い絨毯が床へ敷き詰められ、イタリー製の小さな円卓が部屋の中央に置かれている。三脚の黒革張りな一人掛けソファが等間隔で円卓を囲んでいた。

劉宗一がサングラス越しに二者を見据え、不快感を顕わに鼻を鳴らした。

「こいつはひどいな。クソみたいなツラが左右に見えやがる」

血のごとく赤いネクタイを緩め、ダークスーツの両肩を小さく上げた。

「んで？ 俺達はいつから雁首揃えてお見合いする仲になったんだ？」

「——生憎、我々として君達と顔を合わせるために来たわけじゃないのだよ」

ロディオン・ガルイーニンは椅子の肘掛けへ肘を立て、胸の前で両手を組む。

オールバックの金髪に彫りの深い目元、青い瞳と同色のネクタイを締め、ダークグレーの高級スーツを纏っている。その格好と物腰だけなら紳士と違ってよいだろう。

ロデオオンはロシア陸軍スペツナズを率いた元大佐であり、ロシアマフィア『ワルシヤワゲート』の日本支部を預かっている大幹部であった。

そんな四十代半ばの大柄なロシア人の双眸は、シベリアオオヤマネコを想起させるような鋭さを帯びている。「ロシアの大山猫」という二つ名に相応しい肉食獣の目つきだ。

ゆっくりと足を組み変え、劉は含みのある笑みを向ける。

「へえ、そいつは奇遇だな。俺もむさ苦しい野郎と顔を突き合わせるために来たわけじゃねえんだよ。おっと、失礼。一応、お前さんは女だったな。クライン嬢？」

ナタリア・クラインが顔を屈辱に歪めた。彼女はロデオオンの優秀な部下であり愛人である。蒼海を思わせる瞳に殺意を湛え、紺色なレディーススーツの両肩を震わせた。

劉は射殺するような眼光を受け流し、肘掛けへ座らせた姉妹の腰を抱き寄せる。姉の蘭華は青いチャイナドレスで左から、妹の蓮華は赤いドレス姿で右から寄り添った。

蘭華は優しい印象の奥二重に加え、しつとりと濡れたような黒の長髪と豊満な胸が目を引き美人だ。一方、蓮華は姉より胸囲は控えめだが均整の取れた形をしており、気の強そうな一重瞼とボーイッシュな風なショートヘアが魅力の美少女である。

姉妹の艶やかな肢体を撫で、小馬鹿にしたような口調で言っただけだ。

「おっかない顔するなよ。そんなんじや、男は誰も買ってくれないぜ？」

「……………」

姉妹が嘲笑を浮かべ、憐れむように見下す。ナタリアが唇を噛み締め、スーツの袖に仕込んだナイフを握る。ロデオオンが失笑を漏らし、彼女の動きを片手で制した。

「どうやら、チャイニーズの坊やは価値の違いがわからんらしい。困ったものだ」

「へえ。そりやどいう意味だ？」

「君の目が節穴だということだ。軍人と淫売の見分けがつかんほどにな」

姉妹が眦を吊った。二人はハニートラップを専門とする腕利きの元殺し屋だ。娼婦紛いの方法で何十人も殺害してきたプロである。だが、好きでやっていたわけじゃない。

今にも飛び掛りそうな蓮華を押しさえ、劉は気にした風もなく宥めた。

「ここら、蓮華。黒龍会の承諾無しに戦争をおっ始めるつもりか？」

「でも、劉！ あいつら私と姉さんを！」

「落ち着け。せっかくの可愛い顔が台無しだぞ？」

黒龍会は香港系の中国マフィアである。中国語で「ヘイロン」と発音し、中国黒社会の一大組織として戦前から知られ、劉本人は若手武闘派幹部で通った有名人だった。

ただし、この東京では『六笙商会』の社長と言った方が伝わりやすい。中国語で六笙は「リュウシュン」と発音され、旧渋谷区と港区を中心に支配圏を拡大しつつあった。

戦後、国家体制が崩壊した中国には、黒龍会の支配する都市圏が多い。日本へ送り込まれた中国マフィアの半分が黒龍会所属なほどだ。当然、六笙商会も例外ではない。

二者の応酬に一切興味を示さなかった帝釋正眼が一蹴した。

「喧しい。その臭い口を閉じろ、小悪党どもが」

帝釋は濃緑色の詰襟軍服を着ており、黒い外套を上から羽織っている。精悍さを滲ませた顔の右臉から頬へかけて古傷が走り、黒々とした髪を全て後ろに撫で上げていた。

「貴様ら次に一言でも喋ってみろ。ここで儂自ら叩き斬ってくれる」

体の正面に軍刀が立ててある。大よその刃渡りは二尺三寸、鞘は勝色という濃い紺色に塗られ、白手袋を着けた帝釋の両手は音が鳴るほど強く柄を握り締めた。

関東誠真会の筆頭たる男が放つ威圧感は並ではない。五十代前半とは思えない堂々とした風格を伴っており、日本画の龍を髻髻とさせるような眼光で一同を睨みつける。

鬼島一誠は左隣で端正な顔に苦い色を浮かべ、銀縁眼鏡のブリッジを指で押し上げる。その格好は帝釋と同じだが、右手へ携えた軍刀の鞘は濃い葡萄色をしていた。

「大佐。お気持ちばかりですがお控えください……」

「いいんじゃないの。鬼島」

と、仲神八千代が右隣で大太刀の柄に手をかけている。彼女はスリットの入ったタイトのロングスカートを穿いているが、上半身は鬼島達と同じ詰襟軍服だった。

「こいつは千載一遇のチャンスじゃないか」

シヨートヘアの黒髪を指先で払い、キリツとした目元に余裕を湛えた。仲神は鬼島より八つ歳下の二十八歳だが、鬼島と戦中から対を成した第7義術化旅団の中佐である。

はち切れそうな胸を張り、二勢力を睥睨しながら言い放った。

「閣下が下衆の血でお手を汚す必要はありません。この仲神に賊徒を討てと一言お命じくださればよいのです。こいつらの首ぐらい一薙ぎで切り落として見せますよ」

鬼島が得意顔で振り向く同僚に、海溝より深い溜息をついた。どうした？ と仲神が首を傾げる。ロディオンは暗い笑みを見せ、劉がわざとらしい拍手を送った。

「若者は良いものだ。夢と現実の区別がつかなくとも咎められることがない」

「ご老体。お前さんの飼犬は躰がなつちやいなみだぜ？」

仲神が瞬間湯沸かし器並の速度で怒りを爆発させた。ダンッと一歩踏み出し、大太刀の鯉口を切る。二勢力の付き人達が隠し持った武器を衣服の下から一斉に抜き放つ。それを見計らったようなタイミングで部屋のドアが勢いよく開いた。

「どうも、皆様！ 大変お待たせいたしました」

ラッセルの無駄に明るい声が一触即発の空気を遮る。サミュエルとグラスの載った盆を運ぶイレーナを従え、胡散臭い営業スマイルで媚びながら三勢力を見回した。

「おやおや、どうされました？ 何かトラブルでも？」

イレーナは淡々とテーブルにグラスを並べ始める。仲神が数ミリほど抜いた刃を鞘へ戻し、各付き人達も静かに武器を収めた。劉が白けた表情で啜えた煙草に火を点ける。

「ちよつとした挨拶だよ。お前さんが遅いからこうなったのさ」

「それは申し訳ありませんでした。まずはお飲み物でもどうでしょう？ ご要望がございましたら何なりとお申し付けください。お好きなものをご用意させていただきます」

「さつさと本題を喋れ。鱻の餌にされたいのか、貴様は？」と帝釋。

「失礼いたしました。それでは、早速ではございますが——」

おい、ラッセル、と劉が進行に待ったをかけた。

「先にこいつらがいる理由を説明するのが筋じゃあねえのか？」

三勢力は東京中心部を奪う合う敵対関係にある。国籍、人種、主義主張に至るまで相容れない組織のトップが一箇所に集まったのは、劉の知る限りこれが初めてのはずだ。サンングラスを外し、ラッセルの顔を切れ長な目で睨んだ。

「是非とも納得のいく回答が聞きたいもんだ。なあ、傭兵組合」

傭兵派遣会社や個人の傭兵を束ねる代表組織。それが『傭兵組合』である。

各勢力の抗争には必ずといってよいほど組合が関わっている。何故なら、東京に腐るほど存在する傭兵戦力は、彼らを元締めとして効率よく供給されているからだ。

傭兵は仲介料と保証料を支払う契約で仕事を貰い、各勢力は仲介料を支払うことで必要な規模の手駒を揃えることができる。つまり、彼らは東京の傭兵仲介業者なのだ。

ラッセルは愛想笑いを崩すことなく、ハンカチで額の汗を拭う。

「まあまあ、そう逸らずに。きちんと理由をご説明しますから」

「そうかい。じゃあ、お前さんの話から聞こうか」

二勢力も異存はないようで口を挟まない。ラッセルがサミュエルへ目配せした。

「それでは、私から幹部殺しの件について説明させていただきます」

ここ数週間、三勢力の幹部が殺される事件が頻発していた。どれも手口は一貫していないうえ、時間や場所、被害者の背後関係にも関連性は見当たらない。

共通点は幹部と護衛が無抵抗に殺されていることだけだ。

当然、三勢力は独自に犯人を捜した。まず犯人を特定しなければ報復のしようもない。

ところが、お互いに送り込んだスパイすら殺害されるといふ予想外の事態が起きた。結果、三勢力は傭兵組合へ個別に同じ依頼を持ち込んで今に至っていた。

「——以上のことから、犯人は組織的理由を持たない傭兵である可能性が高いでしょう。なお、組合が請けた中に幹部殺しに類する依頼はありません」

サミュエルがタブレット端末に映る報告書を締め括る。ロデオオンが尋ねた。

「犯人が傭兵だと結論付けた理由は何だね？」

「手際の良さです。一部の遺体を確認した限り、犯人は致命傷となる箇所を無駄なく突いていました。これは敵対組織への見せしめや怨恨を動機としなかったからでしょう」

「そりやどうだかなあ。ここには効果的な殺人方法を熟知してる連中なんて山ほどいるんだぜ？ 例えば、その元スぺツナズご一行様なんか特にな」

劉の言葉には棘がある。馬鹿馬鹿しい、とロデオオンが吐き捨てた。

「我々なら殺しの度に関口を変えるような面倒はしない。むしろ、中途半端な玄人臭さで考えるなら君こそ怪しいだろう。人民解放軍の元大佐殿」

「おいおい、馬鹿言うな。俺達だったら面倒な真似なんかしねえよ。だいたい、最初に殺されたのは俺の部下だ。むしろ、そっちのご老体を先に疑ったらどうだ？」

「黙れ、シナの小僧。蚤虫を一匹ずつ潰すような作戦などやらんわ、馬鹿者め」

ラッセルがわざとらしく咳払いをした。

「……あのう、白熱しているところ申し訳ございません。今回の件、皆様の中に犯人はいらっしゃいません。というのですね、私どもで犯人の情報を探っておりまして……」

「この大馬鹿者！ それを先に言わんか、それを！」

帝釋の怒声を浴びても笑顔を張りつけ、ラッセルは「申し訳ございません」と何度も頭を下げる。その計算されたような態度と表情は、どことなく滑稽だが薄気味悪い。

イレーナにグラスを片付けさせ、サミュエルが円卓へ端末を立てた。

「こちらで雇った情報屋が撮影した写真です」

暗視仕様のレンズで撮影したのだろう。ライトグリーン一色の写真に人影や発砲炎が白っぽい色で写っている。それに視線を落としたナタリアが息を呑んだ。

「——まさか、神近梓に八倉君？」

どうやら神近梓と八倉直人を頭上から撮影したものらしい。死体の傍らで何かを話している姿が写っていた。劉や姉妹も驚きに固まり、帝釋が熊のごとく唸った。

「……おい、若いの。この写真は荒鷲が殺されたときの写真で間違いはないな？」

「その通りです。こちらもご覧ください」

と、サミュエルが画面をスライドさせた。そこには哀れな男達を殴り潰している最中の大男が写っている。鬼島と仲神が「久間大尉」と啞然とした表情で凍りつく。

ほくそ笑むラッセルを横目で見やり、ロディオンは確認するように述べた。

「君はブラックドッグズが犯人だと言いたいわけだ」

「その通りでございます。一連の幹部殺しはカミチカとブラックドッグズの犯行で間違いありません。あの女は皆様を疑心暗鬼に陥らせるべく動いていたのです」

「ほう。それで神近に何の得があるんだね？」

「あの女の目的は皆様をコントロールすることで利益を得ることにあります。皆様にもお心当たりがあるでしょうか？ 例えば、先月のチヨダを巡る抗争はどうです？」

劉が苦々しい顔つきで舌打ちする。ラッセルが片頬を上げた。

「ミスター・リュウはブラックドッグズを直接雇っています。もちろん、お気になさることはありませんよ？　どんな選択をするかは、お客様の権利であり自由でございます」

「その割には恨みがましく聞こえるのは俺だけか？」

「滅相もない。ともかくチヨダの抗争はブラックドッグズの勝利で終わりました。その節に関して、ミスター・タイシヤクには重ね重ねお詫びいたします」

「ふん。やはり、貴様のような外国人の寄越した愚図どもは役に立たん。おかげでシナの野蛮人どもがまだ儂の鼻先をうろついておるわ」

「先に仕掛けて来たのはそっちだろ？　嫌だねえ、ご老体はすぐ呆けて誤魔化す」

ロディオオンが二人の応酬を無視して結論を述べた。

「つまり、各勢力のバランスを崩すことで、神近は常に自らが旨味を持てる抗争が勃発するように仕組んでいた。そういうことかね？」

「さすがはミスター・ロディオオン。実にご聡明でいらっしやる」

「君の下手な世辞はいい。問題は対処の仕方だ」

「あの売国奴の首など儂が刎ねてくれるわ！　鬼島、仲神！　すぐに本隊と——」

パン！　と大きく手を叩き、ラッセルが帝釋の声を遮った。

「お待ちください。その件で私どもからご提案がございます」

「貴様の二枚舌など聞くに値せん。あとで金は払ってやるから口を挟むな！」

「そう邪険になさらず。サミュエル、君から説明したまえ」

サミュエルは端末を手に淡々と述べた。

「今回の件、どの勢力が手を下しても遺恨が残るでしょう。そこで、皆様から依頼料をいただき、私どもが神近とブラックドッグズを処分することを提案いたします」
帝釋が声を荒げる隙を与えず二の句を継いだ。

「皆様は無駄な損耗を出すことなく報復ができ、私どもは仕事として利益を得る。これは決して損な提案ではないと考えます。いかがでしょうか？」

沈黙が室内を満たした。劉はサングラスを掛け、嘲笑混じりに皮肉った。

「お前さんの言う通り、ちゃんと潰せればの話だけだな」

「ご心配には及びません。お忘れですか？ 私どもにはサーカスがあります」

劉は肌が粟立つような戦慄に絶句した。あの狂人どもを使うだつて？ 冗談じゃない。チラッと目を右にやれば、ロディオオンが愉快げに口元を歪めているのが見えた。

我慢の限界だ、と言わんばかりに立ち上がった帝釋が吼える。

「ワケのわからん連中は必要ないッ！ 神近は関東誠真会で潰してくれるわッ！」

直後、西洋人形じみた少女四人が、帝釋を囲むように着地した。相手に軍刀を抜かせる隙すら与えず両手の銃を突きつける。チェコスロバキア製の Vz 85 短機関銃だ。

仲神と鬼島の背後にガスマスクを装着した女が立っていた。ポークパイハットを被り、白シャツの上からタクティカルベストを付け、スーツ地の黒いズボンを穿いている。

ナタリアの首筋へ刃が触れた。グラマーな少女が左右のククリナイフを手に笑う。

「はい、動いちゃダメ。あ、死にたいならいいけどね」

「ご存知だったのですか？」

「昔、人民解放軍にいた頃、一度だけ関わったことがある。悪夢みたいな話だ」
自身の吐いた紫煙を見つめ、苦虫を噛み潰したような顔で命じた。
「秋、事務所に戻ったら情報を集める。神近と組合の動きを徹底的にな」

Black Dogs 3

発行日

2016年8月14日 コミックマーケット90

発行者 よろづ屋本舗

<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

yoroduyahonpo@gmail.com

著者名 黒ねこ作(@gretelproject)

<https://twitter.com/gretelproject>

イラスト 山田サトシ

編集 黒ねこ作

※これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。